

## 9 えだまめの栽培実証

### ○ 結果の要約

沖永良部島のさとうきびやばれいしょ、花き類の後作に栽培可能なえだまめ栽培について検討した。2月上旬～3月上旬に播種し、POトンネル被覆、スーパーパスライトの直がけ被覆を行うことで、4月下旬～5月中旬に26万8千円～29万5千円/10aの所得が得られると試算され、有望な品目であると考えられた。

### 1 課題の背景とねらい

畑かん施設整備が進められている中で、畑かんの水利用の推進と水利用による営農の確立が求められている。そこで、安定生産のために水利用が不可欠で、当地域の主幹品目であるさとうきびやばれいしょ、花き類の後作として栽培可能なえだまめ栽培について検討する。

### 2 関係機関団体との連携、役割分担等

実証は計画・実績作成：農業普及課

実証は設置、調査：知名町技連会野菜部会

### 3 実証内容

(1) 実証場所 知名町育苗ハウス横ほ場

(2) 供試品種 サヤムスメ（雪印種苗）

(3) 耕種概要

ア 作 式 畝幅150cm ベッド幅90cm, 条間15cm, 株間15cm, 5条植, 1粒播種

イ 施 肥 N:P:K=5:5:5 (kg/10a)

ウ 播 種 日 (4) 試験区の構成参照

エ 被覆資材 トンネル:P O, 直がけ:スーパーパスライト

(4) 試験区の構成

No.	播種期	播種日	被覆方法
1	2月上旬	2月5日播種	直がけ
2	3月上旬	3月4日播種	トンネル
3			直がけ

### 4 結果及び考察

(1) 試験経過

トンネル区は、出芽揃い後、バーナーで両側面45度の位置に約60cmおきに穴を開け、収穫直前まで両サイドを土で抑えて被覆した。直がけ区は、約3mおきに杭で抑え収穫時まで被覆した。4月以降、わずかにヨトウ類、カメムシの発生があり、防除は行わなかったが、収量への影響はなかった。温度データについては、機器不良によりデータの回収ができなかったが、トンネル区では日中に42℃まで上昇しているのを目視で確認した。

(2) 調査データ

表1 開花期、生育日数、出芽率

播種期	被覆方法	播種日	開花期	収穫日	生育日数	出芽率
2月上旬	直がけ	2月5日	3月下旬	4月23日	77	98%
3月上旬	トンネル	3月4日	4月上旬	5月10日	67	96%
	直がけ	3月4日	4月中旬	5月13日	70	97%

表2 収穫時の生育 (cm, g)

播種期	被覆方法	主茎長	茎葉重
2月上旬	直がけ	23.3	27.5
3月上旬	トンネル	25.8	30.7
	直がけ	23.6	30.4



左：トンネル被覆 右：直がけ被覆

表3 収穫莢数 (個/a)

播種期	被覆方法	良莢			良莢計	不良莢				不良莢計	合計
		3粒	2粒	1粒		未熟	虫害	病害	奇形		
2月上旬	直がけ	7,444	13,073	5,666	26,183	704	0	0	222	926	27,108
3月上旬	トンネル	10,814	16,369	4,666	31,849	3,777	37	0	444	4,259	36,108
	直がけ	9,481	14,813	4,333	28,627	2,555	0	185	444	3,185	31,812

表4 収量 (kg/a)

播種期	被覆方法	良莢			良莢計	不良莢				不良莢計	合計
		3粒	2粒	1粒		未熟	虫害	病害	奇形		
2月上旬	直がけ	24.1	32.3	7.4	63.8	1.0	0.0	0.0	0.3	1.3	65.1
3月上旬	トンネル	38.8	39.0	7.2	85.0	3.4	0.0	0.0	1.0	4.4	89.4
	直がけ	33.4	41.3	8.2	82.8	3.2	0.0	0.4	0.9	4.5	87.3

表5 収益性試算 (kg/10a, 円/kg, 円/10a)

項目	2月上旬 (直がけ)	3月上旬 (トンネル)	3月上旬 (直がけ)
生産量①	510	680	662
単価②	750	650	600
粗収益③ (①×②)	382,800	442,000	397,440
経費④	114,540	146,540	114,540
所得 (③-④)	268,260	295,460	282,900

注) 単価は、くみ食契約単価(農家振込)で、もぎり料返金50円/kgを含む。経費は、種子代、マルチ代、かん水チューブ(キリコ、2年利用)、P0フィルム、トンネル支柱(5年利用)、トンネルバンド、杭(5年利用)、スーパーパスライト(3年利用)、農薬、肥料

### (3) 結果

2月上旬～3月上旬に播種し、POTunnel被覆、スーパーパスライトの直がけ被覆を行った。出芽率は90%以上で良好であった。また、収穫までの日数は、67～77日で播種が遅い方が短かった。また、収量は、4月下旬～5月中旬に638～850kg/10aが得られ、3月上旬播種では、被覆方法による収穫時期、収量に大差がなかった。

実証結果をもとに、収益性を試算した結果、10a当たり26万8千円～29万5千円の所得が得られると試算された。

### (4) 考察

沖永良部島において、さとうきびやばれいしょ、花き類の後作を想定してえだまめの栽培について検討した。えだまめは、スーパーパスライトの直がけ被覆により省力的な栽培が可能で、さとうきびやばれいしょ、花きの後作としてほ場の有効活用や所得向上が図れる有望な品目と考えられた。かん水ムラで水のかかりが悪かった場所は、出芽が遅く、着莢数が少ない傾向(データ略)であったことから、出芽期及び開花期の適切な水分管理が高単収のポイントであると考えられた。

## 5 残された課題と対応

秋作栽培の検討

## 6 執筆者 中渡瀬 久成